

新刊紹介

倫理學 上卷 和辻 哲郎著

和辻先生は曩に『人間の學としての倫理學』において、存在論的立場での倫理學の可能と必然とを基礎づけられたが、是を「Grundlegung」として現實に、倫理の問題を體系的に叙述せんとされたものが本書である。その時代的意義は大きく、吾が倫理學界にとつて洵に慶賀すべき劃期的なる業績であると云はねばならない。

本書の序論(一——六七頁)では先づ前著を承けて、「人間の學としての倫理學の意義と方法」とが展開されてゐる。即ち『倫理』又は『人間存在』などといふ言葉の本來の意味からしても歸結される様に、倫理學とはまさに人と人との間柄即ち行爲的聯關の仕方をも明かにする學、或は人間存在の理法を自覺する學である。而も倫理學はその様な人間存在を飽く迄も主體的なものとして把握しなければならぬから、當然に、表現を通じての理解といふ解釋學的方法を要求する。さうしてかゝる倫理學の體系は略々五つの問題群(二六——三五頁)に分たれる、ことなどが説かれてゐる。次に本論の第一章(六九——二四〇頁)においては愈々、間柄としてある人間存在の二重性——全體性と個別性——が分析されて、個は全の否定としてみ立てられ、逆

に、全も個の否定してのみ起ること、従つて個も全も共に空と否定とを本質とすること、かくして「人間存在の根本理法」は「絶対否定性が自己否定を通じて己れに還る運動(一九四頁)に外ならないことが、日常的諸事實の繊細豐富なる分析を出發點とすることによつて論結されてゐる。さうして此の人間存在の根本理法に基くことによつて、善惡、自由、責任などの倫理學的的基本範疇が存在論的に、但し茲では未だ形式的意味において、規定されてゐるのである——例へば惡とは全體性から個別性が背き出つ、停滞すること、善とはかゝる個別性の再否定によつて本來的な全體性が實現されることなどとして——。最後に第二章(二四一——五四五頁)では、全體性から分れ出た個人が多數者であり、且つそれは恒に「現前において本に來つゝあるものである以上、人間存在の空間性と時間性」と取り出して展開されることになつてゐる。さうして是ら二つの人間の在り方が相即した處に、人間の行爲の真相が求められ、吾々の行爲とは「無數の自他への分裂對立を通じて本に歸る(四〇三頁)」といふ間柄的運動に外ならないことが洞察されてゐる。ところどころかかる意味での行爲的聯關は必然に、人々の間に信頼と裏切り、又は眞實と虚偽といふ事態を起らせる。そこで先に形式的に規定せられた善惡等の概念は、今や空間的時間的存在性の地盤の上で内實的に——併し未だ風土的歴史的に具體的ではなく——次の様に解釋されてゐるのである。善とは種々なる信頼に答へて種々なる人間的眞實を起らしめることである。惡とは信

頼を裏切つて、その様な眞實を起らしめないことである。罪責とは爲すべきことを爲さないといふ裏切り又は本來性よりの背反の意識である。良心とはかゝる背反せるものへの本來的全體性からの呼び聲である、と。

本書の梗概は略、以上の如くである。(次巻においてはかくの如き人間行爲が既に踏み固め又將に踏み固めらるべき道、即ち種々の人倫的組織とそれらが於いて實現せられる風土的、歴史的、國民的地盤の構造とを分析される意圖の様である。)そこではいつでも、主體的に間柄をなして行爲してゐる人間存在の「あり方」に基いて、倫理の意味即ち理法が規定されてゐる。その一般的立場は明かに實存哲學的、存在論的である。茲では就中、個人意識を出発點とする倫理學や、或は生物學的・心理學的等々の兎も角一定の存在者を前提として立論する倫理學が、實存そのものの立場からして根底的に批判せられてゐる。本書が聽ぶべき重要な時代の意義はまさにかゝる點に存する。何となれば今日の様に社會生活の停滯と危穢性が漸く顯著になつて來た時代では、人間の存在可能性そのものが反省せられ、その様な存在自體の根柢からして凡ての決算と企劃とがなされねばならないからである。この様な存在論的・實存哲學的倫理學への要求が今や本書において満されたのである。而も既に夙クニイテエヤキエルクゲールの研究に先鞭をつけられた著者によつて——本書が訓期的意義を擔ひ得る所以は決して偶然ではないと云はねばならない。吾々は先生に對する敬慕の情を茲に

復新しくするものである。

併し乍ら繚つて惟ふに、間柄としてある人間存在の理法は、此の上なく錯綜を極めてゐる様に思はれる。而も倫理學はその様に複雑な人間存在を、確かにその「主體性」において把へる必要があるのである。その場合倫理學にとつては、實に問はれるものが實踐的、主體的な人間であるのみならず、實に、問ふてゐるもの(倫理學者)自身も亦まさに倫理について問ふてゐることにおいて、實踐的・主體的に存在してゐる筈である。さうとするならば特に倫理學者自身に對して表はされる信頼と普通の人々に對して表はされる信頼、従つて又倫理學者自身が倫理を問ふことにおいて世の中に起らすべき眞實と、普通の人々が起らすべき眞實とは、如何に異なるのであらうか。普通の人々でも、特に倫理を問ひ又は學んだ時には、眞實の起らせ方において如何なる本質的差異を示す様になるだらうか。爾他の科學——例へば諸自然科學は固よりの事、心理學、社會學等々の精神科學であれ——にあつては、たゞ客體化された對象が問はれる計りであるからして、學問に携る(それを問ひ又は學ぶといふ仕方)で主體は一應括弧に入れられて差支無いのみならず、寧ろその方が望ましい。併し乍ら人間の主體を主體として取扱ふ倫理學では必然に、問ふもの自身と問はれてゐるもの自身とが、倫理學そのものを媒介として恒に「共鳴」(Resonanz)してゐなければならぬ。即ち吾々は倫理學の特殊なる學問的性格とその可能方法とについてのみならず、同時に倫理學者の人間の在

り方を最初において反省しなければならぬ。但し吾々は先生がそのことについて、本書で何等觸れられてゐないと云はうとするのではない。吾々は唯、倫理學がそんな反省を強いる程に迄根源的で特異な學問であることを云ひたい計りである。扱て倫理學がかくの如くに根源的で又特異な學問であるとするならば、本書の第一章において人間存在の根本理法が、單に全體性と個別性との二重性並びにその間の相互否定性として規定されただけでは、何かそこに未だ盡されない物がある様に感ぜられる。少くも人間存在の「主體性」を眞に主體性として把握するには、更には一二の項を導入せねばならない様に感ぜられる。延いては第二章において、空間性時間性の相即において人間行為の意味及び善惡等の根據が解釋されてゐる箇所についても同様に、——勿論未だ人倫組織的、風土的、歴史的規定に迄は進んではゐないのであるから、抽象的段階に止つてゐることは當然であるとは云へ——、なほ單に信賴と裏切り、眞實と虚偽との對立だけでは、善惡——少くも主體的な意味での善惡は未だ充分に規定し盡されてゐない様に考へられる。例へばキェルケゴール、コーヘン、ハルトマン等々も擧げてゐる Reinheit の原理——有(存在)において無(非存在)を求めざる在り方——などもそこに必要なものではあるまいか。或は、根源的な時間性及び空間性を日常的な乃至は自然科学的な時間性及び空間性にまで媒介するところにこそ、「行爲」の眞の意義が認められるのではあるまいか。従つて又人間存在における裏切りと虚偽とも

亦、時間性及び空間性の意味が自他の間で異つてゐる時にこそ、そうして惡とは、たゞ、一つの信賴と他の信賴との喰違ひといふ高次の立場でのみ、起るのではあるまいか。以上を要するに、善と惡、眞實と虚偽、信賴と裏切り、全體性と個別性とは、同次元において單に相互否定的に對立するものではないと、吾々には考へられて仕様がないのである。

以上は讀後勿々、未だ感激の醒めやらぬ間になれる紹介と感想とである。又未だ明確な形をとらずに單に消極的な立場で奔せられた一二の妄語であるに止つてゐる。妄語については先生の寛容に甘へてであると云はねばならぬ。併し乍ら此の蕪辭を以つてせる本書の紹介も亦、決して、本書が有する重要な價值と當然享けるべき高い評價とを少しでも毀ねるだらうとは想はれない。何となれば本書の著者は今迄に既に、驚歎すべき多くの獨想的な業績を以つて、人々を充分に啓發してゐられるからである。また人は此の新著のどの頁を開けても、そこに直ちに、具體的・日常的な事柄についての興味深い觀察か、或は理法に對する鋭い洞察か、乃至は古今の學說についての卓れた解釋や批判かのどれか、流麗適確な筆致で叙せられてゐるのに出會ふことができるだらうからである。倫理に思を潜めんとする人人に推稱して息まない次第である。

(岩波書店、定價參圓) (田中魁)